

金澤古蹟志卷八

城外新堂形邊

○尻垂坂通

小立野より新堂形前へ出づる往來の坂路を尻垂坂と呼べり。故に廢藩置縣の際此の通りを尻垂坂通と稱し、町名となしたり。按ずるに、銀座方舊記に載せたる承應三年七月十二日金澤會所より銀座への書簡に、金澤汁谷町四郎右衛門と見え、同年八月晦日の書簡にも同様記載せたり。されば此の時代は汁谷町と呼びたりしこと知られけり。彼の坂路をば汁谷、或は尻谷、また修理谷など書き來れり。年譜に、しりたれば共あれども、今はしりたに、或はしゆりたに共呼べり。

○前田利章君館跡

其の遺地今不詳といへども、汁谷坂の坂上にて、今兼六園の後、地なるべしといへり。利章君は、舊藩五世參議從三位

綱紀卿の次男、幼名富五郎、後造酒丞と改稱せられたり。

加陽年譜に云ふ。寶永二年四月尻谷坂之上に富五郎殿之御殿出來、上奉行篠原頼母被仰付、同四年四月十六日富五郎殿御新宅へ御移徙。七月十一日富五郎殿元服被成、御名富丸殿と被改、後造酒丞殿と改稱。十月朔日敬姫君造酒丞殿御同道、金澤發途、江戸へ被爲入。とあり。さて同七年大聖寺侯利直君の嗣子と成り、正徳元年正月襲封、從四位下備後守に叙任せられたり。故に大聖寺藩襲封の後、右尻谷坂上の館をば金澤來駕の旅館となし、綱紀卿在世中折々金澤へ來り給ふ頃、必ず此の館に滯留せられたりといへり。

金澤町會所留記に載せたる享保三年五月十六日の書簡に、備後守殿御旅宅向之邊囑託札場之際より物構堀を越え、土居へ上り申躰に而足跡有之、爲縮右積垣出來方作事奉行中へ示談之上出來すと見え、同五年正月の書簡に、備後守殿當地へ被爲入、町屋に御入無之、御旅宅へ可被爲入、御逗留中乘馬扨御入用に候はゞ、爰元被殘置馬共之内宜敷分相撰、御旅宅に相立候様被仰出といふ事など見られたり。按ずるに、綱紀卿在世中金澤へ毎度來駕ありしことは、